近江の古鏡Ⅳ

前２回で旧郡域の栗太・甲賀・野洲３郡の出土古鏡についてその大要を説明しました。今回は上記以外の近江全域について述べましょう。

まず蒲生郡では、有名な安土町桑実寺の瓢箪山古墳で舶載の夔鳳鏡１面と仿製の斜縁二神二獣鏡１面が出土しました。この瓢箪山古墳は前期の前方後円墳として早くから知られており、昭和11年の調査で前述の２面の鏡が出土しました。鏡と同時に出土した遺物は、鍬形石１、車輪石１、石釧２、管玉約23、筒形銅器２、銅鏃30、鉄鏃23、鉄刀３、鉄剣14、鉄刀子５、鉄斧頭７、鉄鎌３、鉄鉇４、短冊形鉄板１、短甲鉄板１括、異形鉄器１括等でした。鏡をはじめこれらの遺物はすべて京都大学にあります。夔鳳鏡は直径15cmで、鈕をめぐる糸巻形の四葉形の内に「保子宜孫」の銘があります。16連弧の内行花文帯の外側に素文の平縁がめぐり、内行花文と四葉形の間には、相対する双鳥を４対描いています。夔鳳文というのは中国古代の銅器の文様の一つで、このように鏡の名称にするのはふさわしくないという学説もありますが、在来の呼称に従って夔鳳鏡とします（１）。二神二獣鏡は、４個の乳で分割された各区画内に神像と獣像を交互に描き、神像には侍者が副えられています。この鏡は最初舶載鏡として報告されたように、図像は舶載鏡を忠実に写しています。直径は13.4cmです（２）。

近江八幡市上野町の上野車塚古墳で、明治45年に舶載の四禽鏡が１面発見されました。鏡は半分欠失していますが、直径は７cmと推定されます。内区の文様は、鳥の像を入れた４区画に分割されています。この鏡は現在近江八幡市立郷土資料館に勾玉１、金銅製帯金具５、鉄石突１と共に展覧されていますが、この上野車塚古墳について述べている「近江蒲生郡志」によれば、鏡の伴出遺物としては鉄刀、鉄鏃、鉄釘があげられており、現在展覧されている遺物とは一致しません（３）。

このほか「近江蒲生郡志」には、近江八幡市千僧供の供養塚古墳と竜王町薬師の岩ヶ鼻古墳で古鏡が出土した由を伝えていますが、これらの詳細は不明です。供養塚古墳で鏡が発見されたのは江戸時代の寛文年間のことのようです。この古墳では昭和８年に短甲１、鉄刀５、鉄剣５が出土しており、さらに最近の圃場整備事業に伴う周辺の発掘調査で、従来言われていたような円墳でなく、周溝をめぐらした帆立貝式古墳であり、しかも埴輪がめぐっており、周溝に面した造り出しの部分には多くの形象埴輪が立っていたことがわかりました。竜王町八重谷の埴輪を伴う古墳からも、管玉や琴柱形石製品と共に古鏡が出土した由が「滋賀県史蹟名勝天然記念物概要」に述べられていますが、この鏡も現在所在不明で、鏡に関する詳細はわかりません。また「近江蒲生郡志」には、安土町の沙々貴神社に七鈴鏡があったことが述べられています。この鏡は他に渡ってしまったようで、現在その所在は不明です。鈴鏡の出土地については何も伝えていませんが、沙々貴神社にあったところからこの付近出土と考えるのが妥当なようです。鈴鏡ですから仿製の古墳出土鏡と

見るべきでしょう。

神崎郡では「人類学雑誌31－１」に載せられた遠山荒次氏の論文中に、能登川町猪子の古墳から１面の古鏡が出土している由の記載がありますが、これの詳細は不明です。同町では最近の発掘調査で２面の古鏡小破片が古墳以外の場所で発見されました。一は舶載の内行花文鏡で、同町神郷における斗西遺跡の調査の際に、昭和61年10月漁業遺構の近くで発見されました。「宜」と銘の一部が残っており、これは「長宜子孫」銘の内行花文鏡と思われます。意識的に破砕された小片で、出土の場所からも、この鏡は何らかの祭儀と関係があるものと思われる鏡片です。報告書によりますと、鏡の大きさを復原すればその直径は10.2cmほどのものと思われます（４）。二は仿製の鳥文鏡で、昭和59年伊庭における圃場整備事業に伴う事前調査で発見されました。この鏡片は外縁部が欠失していますので全体の大きさはわかりませんが、10cm前後と推定されます（５）。

愛知、犬上両郡では古鏡の発見報告が殆んどありません。彦根市正法寺町で１面の鏡が出土したとの説もありますが、真偽は不明です。総説の統計では一応古墳出土不明鏡として計上しておきました。昭和62年彦根市の旧松原内湖における県営下水処理場建設に伴う事前の発掘調査で、古墳時代の包含層から１面の小型仿製鏡が出土しました。直径 3.2cmの鏡で、鏡背には円圏が一つあるだけで他に文様はありません（６）。

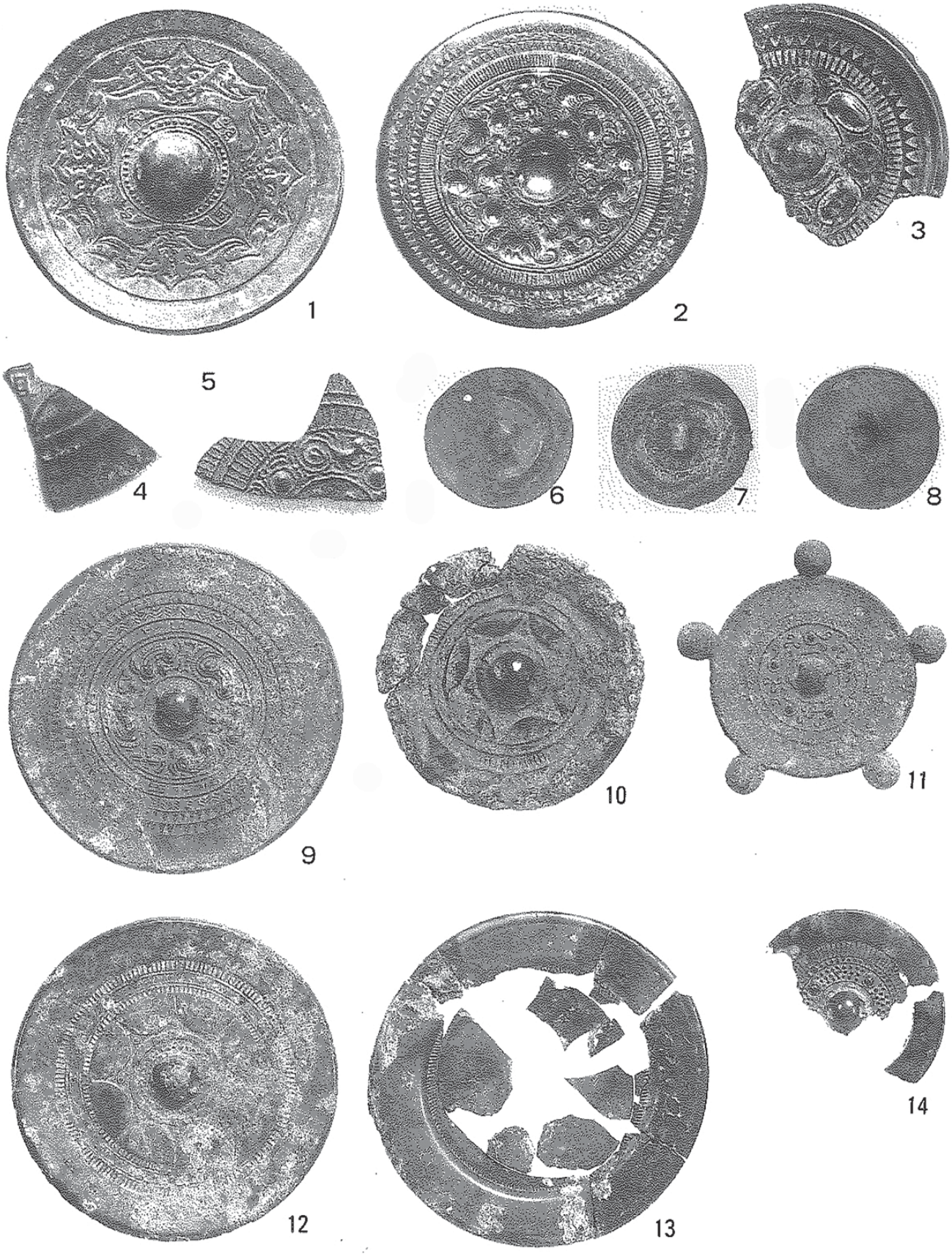
このような小型仿製鏡は、昭和62年坂田郡近江町の高溝から顔戸にかけての調査の際にも２面発見されました。大きい方には２円圏が認められますが、小さい方は素文のようです。大きさは、短径 3.5cm、長径3.65cmとやや楕円形のものと（７）、直径3.3cmの正円のもの（８）の２面です。同町能登瀬の山津照神社は式内社として有名ですが、明治15年に行なわれた参道工事の際、境内の古墳から３面の仿製鏡が出土しました。鏡以外にも多くの出土品があり、この時出土した水晶製三輪玉５、鉄刀３、鉄刀子３（内１口は鹿角装）、杏葉、轡、鐙及び雲珠や鞍橋覆輪の破片等の馬具類、須恵器、埴輪破片は３面の鏡と共に滋賀県指定の文化財となっています。鏡は五獣鏡、内行花文鏡、五鈴鏡で、前述の如くすべて仿製鏡です。五獣鏡は直径13.2cmで、内区には５個の獣像があり、その外側には偽銘帯があります（９）。内行花文鏡は直径が 7.1cmで、縁部の銹化がひどく、一部は細かく壊れています（10）。五鈴鏡は直径が 8.5cmで、内区は５乳を曲線がとりまいていますが、何が簡略化されたのかわかりません（11）。

米原町河南の石渕山古墳で大正７年に舶載の内行花文鏡が出土しました。伴出遺物としては金環２、鉄刀１、馬具破片、須恵器があります。鏡の大きさは直径11.7cmで、鈕座が内行花文鏡に多い四葉座や蝙蝠座でなく、円座系のものです。地元の個人の所蔵となっています（12）。

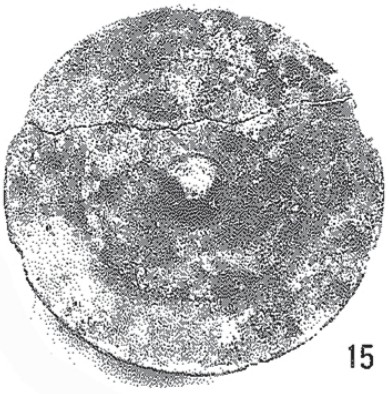
明治35年、現在の長浜市垣籠町の垣籠王塚古墳から仿製の変形文鏡が出土しました。伴出遺物としては勾玉１、管玉10、小玉70、鉄刀１、鉄剣１等があります。これは宮内庁書陵部に送られましたが、現在では所在不明です。したがって実物を見ることができず、写真もありませんので、当時の報告に依る以外に調査の方法がありません。大きさは直径が13.6cm（原文直径４寸５分）です。

東浅井郡虎姫町三川の丸山古墳から昭和53年の圃場整備事業に伴う工事中に舶載の獣帯鏡が発見されました。破損が大きく、特に内区の欠失部分が大きいため、その文様の全容を述べることはできませんが、幅の広い縁部は唐草文帯となっています。鏡の大きさは直径11.5cmで、付近で鉄剣１が採集されました（13）。

浅井町では大正３年田川の兀山古墳で仿製珠文鏡１面が発見されました。現在は東京国



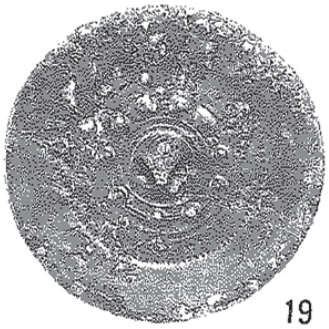
1.2. 安土瓢箪山古墳　3. 上野車塚古墳　4. 斗西遺跡　5. 伊庭遺跡
6. 松原内湖　7.8. 高溝遺跡　9.10.11. 山津照神社古墳　12. 石渕山古墳
13. 丸山古墳　14. 兀山古墳

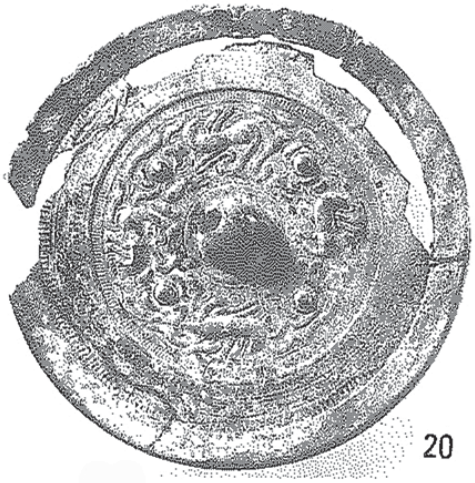

15

16

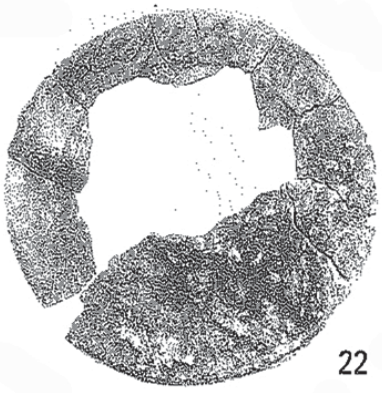
17

18


19


20

21


22

15．塚原古墳群　　16.17．雲雀山
18．種路古墳　　19．涌出山古墳
20．古橋　　21．田中古墳群
22．鴨稲荷山古墳　　23．大塚山古墳
24．上高砂遺跡　　25．蛍谷川底

23

24

25

1～3、9～14、18、19、21、
　寿福　滋氏写真
15、斉藤　忠氏写真
16、17、大阪市大報告書より
20、中司照世氏写真
22、京都大学考古学研究報告より
23、日本古文化研究所報告より
4～8、24、25、西田写真

立博物館が所蔵しています。欠失部分が大きいものですが、鈕から鏡縁までの一部が残っていますので、その全容を知ることが出来ます。主文様帯は乳で分割された区画内に珠文を三重に並べています。鏡の大きさは直径が7.5cmです（14）。伴出遺物としては勾玉５、管玉６があります。同町醍醐の塚原古墳群中の一古墳から仿製の内行花文鏡１面が出土しました。これは現在浅井町教育委員会の所蔵となっていますが、一部が欠失しており、白く「145」と書かれています。しかし、発見の際は欠失の部分もあったようで、完形の写真があります。この写真では番号は書かれていません。これは発見の年月や一部欠失した経緯も一切不明です。写真は古い完形のものを載せました。大きさは径9.4cmで、６個の花文とその外にめぐる櫛歯文帯が辛ろうじてわかります（15）。昭和25年に大阪市立大学文学部が山ノ前の雲雀山（ひばりやま）古墳群の調査を行ない、２号墳から仿製の五獣鏡１面を、３号墳から仿製の四獣鏡１面を発見しました。２号墳出土の五獣鏡は報告書では変形獣文鏡（変形五獣鏡）と称され、直径は11.7cmです。鏡背の獣形は異形化されています（16）。伴出遺物には勾玉２、丸玉114、小玉18、鉄刀２、鉄剣３、鉄矛１、鉄鏃２括、三輪玉、短甲、鉄刀子や鉄鎌があります。３号墳の四獣鏡も報告書では変形獣文鏡（変形四獣鏡）となっており、主文様の獣形は２号墳鏡の獣形とよく似ています。直径は10.7cmです（17）。伴出遺物には鉄剣１、鉄鏃があります。

湖北町山本の種路古墳からは、明治４年に仿製の四神鏡が１面出土しました。大きさは直径8.7cm、現在は東京国立博物館の所蔵となっています。主文様帯は４個の乳で区画された中に変形の神人が各１体ずつ描かれ、地文として珠文が全体を埋めています（18）。伴出の遺物としては勾玉１、管玉２、金環１があるようです。なお、富岡謙蔵氏の「日本仿製古鏡に就いて」という論文中の四獣鏡の一覧表に「近江国東浅井郡（攄濱田君報告）」という１面がありますが、これについてはこの１行以外のことはわかりません。

昭和54年北陸自動車道建設の際の事前調査で、高月町唐川の涌出山（ゆるぎやま）古墳から１面の仿製乳文鏡が出土しました。直径8.1cmの小型鏡で、内区は10個の乳が複線でつながっている簡単なものです（19）。この鏡の鈕孔は特殊な趣を示し、中心部をずらして貫通させた鈕孔に斜上方から穿孔した孔が直交しています。この古墳は墳頂部と墳丘裾部に埴輪列がめぐっており、主体部の被覆礫層からは形象埴輪片も出土しています。伴出遺物としては鉄刀１、鉄刀子片２．勾玉４、管玉12、ガラス玉82があります。

福井県敦賀市の私立敦賀博物館に、木之本町古橋出土と伝えられる仿製の四獣鏡１面があります。外区の部分に欠失がありますが、内区は完存しています。径は15.3cmで、４個の乳で分割された区画内に各１獣が描かれています。この鏡の出土事情はわかりませんが、鏡面には布帛が付着しているようです（20）。この鏡については筆者は実見しておらず、福井県教育委員会の中司照世氏に調査をお願いし、写真も同氏のものを使わせていたゞきました。なお、これは根拠の無い憶測にすぎませんが、前述の富岡氏の報文中の四獣鏡がこの鏡で、出土地についていずれかが誤って伝えられたのではとの思いもします。「近江伊香郡志」には同じ木之本町大音の一古墳で鏡が発見されたことを述べていますが、これについては何ら資料がありません。あるいはこちらが出土地が誤って伝えられた敦賀の四獣鏡であるのかもしれません。しかしこれらのことは単なる憶測ですから、一応古橋出土の現存鏡１面と伝承の鏡２面として一覧表の数字は計上しました。

高島郡今津町弘川の丸山古墳では明治19年に人物模様のある鏡１面が、刀剣や甲の破片と共に発見されました。この鏡は現物の所在

は不明で、記録にある人物模様が如何なるものかなどその詳細はわかりません。

安曇川町では陵墓参考地の王塚古墳のある田中古墳群の中で昭和19年に１面の鏡が出土し、現在田中神社の所蔵となっています。鏡背の模様は磨滅銹化がひどいため正確にはわかりません。強いて推測すれば、仿製鏡で、４個の乳で区切られた四獣鏡と見るべきかもしれません。鏡の大きさは直径10.5cmです。これと一緒に３口以上の鉄刀破片が出土しています（21)。この田中古墳群に程近い南古賀の御霊神社は古墳の墳丘を利用した社地にある神社ですが、この古墳は小字名により冠掛古墳と名付けられています。ここで嘗て鏡が他の遺物と共に発見されました。しかし、これは神社境内であるため、そのまゝ埋め戻されたとも言われており、その詳細はわかりません。

高島町鴨の稲荷山古墳は最近の斑鳩藤ノ木古墳との関連で俄に脚光を浴びるようになりました。これは石棺や副葬品が藤ノ木古墳のものと非常に類似しているからです。ここでは明治35年に仿製の内行花文鏡が発見されました。その大きさは径15.6cmで、破損のひどい鏡です（22)。明治35年の発見と大正12年の京都大学の調査で明らかになった副葬品は、鏡のほかに金製耳飾１対、金銅製冠１、同沓１対、切子玉42、棗玉12、環頭大刀１、鹿角製柄頭付鉄刀２、鹿角製柄鉄短刀１、鹿角製柄鉄刀子８、金銅製三輪玉７、金銅製雙魚佩２、鉄石突２、鉄斧頭２、金銅製金具類残欠、金銅製鞍飾具１具、鉄地金銅張飾板付鉄轡１、鉄地金銅張杏葉６、鉄地金銅張雲珠６、鐙１、銅鈴３、鈴具、須恵器類があります。

志賀町と大津市にまたがる大塚山古墳から明治40年に舶載の盤竜鏡１面が発見されました。これは京都国立博物館に保管されていましたが、その後東京の個人蔵となり、戦災で所在不明となりました。内区は竜虎の組合せと思われ、この周囲に銘帯があって、時計廻りに次の銘文があります。

青蓋作竟四夷服　多賀国家人民息　胡虜殄滅天下復　風雨時節五穀孰　長保二親得天力

この銘文中の「人民息」は「人馬息」と読まれていましたが、精査の結果「人民息」が正しいようです。大きさは径13cmです（23)。伴出遺物には勾玉１、管玉13、銅鏃５、鉄斧頭２、刀剣甲冑の残欠等があったようです。

「新大津市史別巻」の木岡陵に関する記述の中に、この付近から古鏡が出土したとの伝承のあることが述べられていますが、この鏡については詳細不明です。昭和63年国道 161号線バイパス工事に伴う事前調査の際、上高砂遺跡において舶載の方格規矩四神鏡の破片が発見されました。この鏡片は流出土砂中に混っていたようで、この鏡片本来の存在遺構は不明です。鏡片の破砕面は自然の腐蝕等によるものでなく、截然と割られており、明らかに意識的な破砕鏡と思われます（24)。また昭和57年度の水資源公団による琵琶湖綜合開発事業に伴う事前調査の一環として行なわれた大津市蛍谷の瀬田川浚渫工事の事前調査で、直径 3.9cmの仿製櫛歯文鏡が発見されました。これは発見場所が瀬田川底であり、本来の遺構に伴うものでないため、出土の事実を述べるにとどめます（25)。

平成元年９月蒲生平野の中の独立丘である雪野山（竜王山）の山頂で１基の前期竪穴式石室が発見され、三角縁神獣鏡３面と仿製内行花文鏡、鼉龍鏡（鼉龍とはワニのこと）各１面の計５面が出土しました。これについては現在調査が続行中のため、ここでは出土の事実を追記するにとどめ、その詳細については後日を期すことにします。また、草津川付替工事に伴う事前調査中の草津市北萱遺跡で１面の小型仿製素文鏡がごく最近発見されましたが、これも調査継続中のため出土の事実を予報するにとどめます。

（西田　弘氏　提供）